

# 光り輝く島スリランカ



高橋 周平 (たかはし しゅうへい)

前・在スリランカ日本国大使館書記官

2003年国土交通省入省。2012年4月～15年3月まで、在スリランカ日本国大使館の書記官として政府開発援助（ODA）案件に関する企画立案、当地に進出する日本企業のサポートなどを担当。現在は国土交通省北海道開発局農業設計課開発専門官。

## はじめに

大国インドから29km隔てたインド洋に浮かぶ島国スリランカは、サンスクリット語で光り輝く島を意味し、かつてはセイロンと呼ばれていました。

長く続いた内戦が2009年によりやく終結し、それ以降は復興を背景とした好景気が続いています。また、治安も非常に安定しているため、新たなビジネスチャンスを求める経済人や、未開拓の観光資源を求める観光客が各国から次々と押し寄せ、近年スリランカの注目度はうなぎ登り。調子に乗って10年にはニューヨークタイムズ誌で「訪れるべき国第1位」に、ロンリープラネット（世界的に有名な旅行ガイドブック）でも13年の「もっとも旅行したい国No.1」に選ばれるなど、遅ればせながら本来の魅力的な姿が世界で評価され始めています。

今回は、そんな訪れるべき国、旅行したい国スリランカで勤務・生活した経験を基に現地の様子を思いつくまご紹介したいと思います。

## スリランカ概観

スリランカはアジアと中東、欧州を結ぶ海上交通の要所に位置する常夏の島国で、北海道の8割程度の国土におよそ2,000万人が暮らしています。四季はなく年に2度の雨季と乾季を東西岸で交互に繰り返しています。日本との時差は-3.5時間。成田空港からは最短9時間でバンダラナイケ国際空港に到着します。南国特有の強い日差しと少しじめっとした蒸し暑さがありますが、屋根の下でじっとしていれば日本の夏より快適かもしれません。



空港で車に乗り換え、まだ新しい高速道路<sup>\*1</sup>で南にあるスリランカ最大の商業都市コロンボを目指せば、途中右手には真っ青なインド洋、左手には深緑のジャングルやプランテーション農園を目にすることができます。農園は全国各地にあり、ここで栽培されている天然ゴムやココナッツと、スリランカ南中部で栽培される紅茶がこの国の重要な輸出品です。一方、この国を取り囲むインド洋の新鮮な海産物や美しいビーチは貴重な観光資源です。

さて、30分ほど走るとコロンボ市に入ります。そこで最初に驚かされるのは喧噪<sup>けんそう</sup>のすさまじさ。行き交う車が鳴らすけたたましいクラクションや人がわらわらと動き回る光景は、他のアジアの都市と同じ。ただ、街並みは未だ近代化が進んでいません。また、古い日本の中古車も多く走っていて、車体のロゴからは日本の温泉旅館で活躍していたかつての情景などがうかがえます。今スリランカでは、戦時経済下で後回しにされた都市インフラの整備が急ピッチで進められているところですよ。

そして、このくらいになって気づくのは、道路にあまりゴミが落ちていないことと物乞いが少ないこと。この点では近隣の途上国と比べても歴然とした差があります。もちろん政府の施策によるところも大いにありますが、古くから整備されてきた教育システムが重要な役割を果たしているといえます。この国には中学校までの義務教育制度があり、識字率は90%を超えています。ちなみに、社会主義政策の名残として、今も原則として教育と医療にかかる費用は無料です。

## 歴史

スリランカが歴史の舞台に登場するのは紀元前3世紀。インドから伝わった上座部仏教を信奉するシンハラ人が、中部アヌラダプラを中心に仏教王国を建国したことが始まりです。実は当時、この国は世界屈指の先進国として栄え、特に最新の灌漑技術<sup>かんがい</sup>や仏教に関しては世界中から多くの留学生が学びに来たほどでした。高名な法顕<sup>ほっけん</sup><sup>はる</sup>も遥か中国からこの地を訪ね、その

見事な仏教伽藍<sup>がらん</sup>に感動したと記されています。

一方7世紀頃からは、アラブ商人が西部の小さな港町であったコロンボに入植し、静かにシナモンや宝石などの交易を行っていました。これに目を付けたポルトガルが16世紀、シナモン貿易の独占を狙ってコロンボからアラブ人を追い出し、シンハラ王国などを次々と攻略しながら島内を支配していきました。その後3世紀以上にわたって、オランダ、英国とヨーロッパによる支配が続き、この島が英国連邦内自治国「セイロン」として独立したのは1948年のことでした。シンハラ王国の遺跡や、ヨーロッパ植民地時代のコロニアル建築の商館や要塞などの多くは、世界遺産に登録されるなどして今も各地に残り、それぞれの時代の情景を後世に伝えています。

独立してからは、ヒンドゥー教を信奉するタミル人の一部が、多数派で仏教を重んじるシンハラ人中心の政権に反発し、反政府過激派組織「タミル・イーラム解放の虎（LTTE）」を結成。武力闘争を起こします。四半世紀にわたって国や人々を疲弊させたこの内戦に対し世界各国も様々な介入を続け、2009年、内戦は政府がLTTEを武力制圧することでようやく終結に至りました。

その後、治安は急速に安定し、国民が平和を謳歌<sup>おうか</sup>しています。今ではLTTEの支配領域であった北・東部への移動も制限付きで可能になっています。

## 国民性・宗教・文化

スリランカでは民族的に大別してシンハラ人、タミル人、ムーア人の3民族が、宗教的には仏教を多数派として、ヒンドゥー教、キリスト教、イスラム教が共存しています。もちろんそれぞれにアイデンティティをもち、生活、文化においても特徴がありますが、スリランカ人は総じて人懐っこく、多少思慮が浅いところもありますが、何よりとても親日的ですよ。

「親日的」については、島国であることや仏教国であること、隣国に大国があることといった共通点の多さだけでなく、内戦中の経済支援のほか、明石康政府

### ※1 新しい高速道路

コロンボーカトナヤケ・エクスプレスウェイ：2013年に中国支援によって開通した高速道路で、コロンボとバンドラナイケ国際空港のあるカトナヤケを結ぶ。日本はこの2年前に開通したコロンボとゴールを結ぶスリランカ初の高速道路（サザンエクスプレスウェイ）の建設を支援。

### ※2 法顕

中国、東晋時代の僧。399年に陸路でインドに向かい、14年後に海路で帰国した。大般涅槃経（だいはつねはんぎょう）や摩訶僧祇律（まかそうぎりつ）などを漢訳。

代表らによるスリランカ和平への積極的関与について広く好感がもたれていることなどもその理由です。こういった背景から、親日国スリランカではドラマ「おしん」が何度も繰り返し再放送されており、多くの共感を得ています。

また、日本の技術や品質に対する信頼もゆるぎないものがあって、通行する乗用車のほとんどが日本車。最近では環境にやさしいハイブリッドカーが急増していますが、まだまだ古い車種もよく見られ、民間業者などは、中古車に残る日本語のロゴを自身の業務とは無関係であっても信用の証としてそのまま残しています。朝・夕のラッシュ時、満員の乗り合いバスの側面に「××幼稚園」などのロゴを見つけると、日本人としては何ともほほえましい気持ちになります。また、自家用車を持ってない所得層でも日本製のボールペンなどをとても大切に使ってくれます。彼らに言わせると、どこの国でも作れる簡単なものだからこそ、使いやすく長持ちするといった日本の当たり前技術に差を感じるそうです。こういった日本ブランドへの信頼から、スリランカ人の中には、日本で職業訓練を受けた人も少なくなく、オフィスや工場、病院、公的機関の一部などで、5S<sup>\*3</sup>などの日本式管理手法の導入が進んでいることも特徴の一つです。

さて、食文化については、民族、宗教にかかわらず1日3食のカレーが基本。お皿の真ん中にこんもりと盛ったご飯に、フィッシュカレー、豆カレー、ポテトカレー…と様々な種類のカレーを手で混ぜ込んで食べるのがスリランカ流です。だから、ご飯もカレーも熱くない人肌温度。これらと合わせてサンボルというふりかけのようなものやホッパーという米でできたクレープのようなものも日常的に食べられています。ただ一般的な日本人にとってスリランカの食事は少し辛すぎるので、レストランでどうしても食べられないときは、店員さんと呼びマイルドにしてほしいと伝えてください。きっと親切に作り直してくれます。ただ、なぜかさらに辛くなって再登場する場合がありますので要注意。そしてカレーの後はデザート。実はスリラ

### ※3 5S

製造業・サービス業などの職場環境の維持改善のために日本で生まれた概念。各職場において徹底されるべき事項を5つにまとめたもの。整理、整頓、清掃、清潔、躰（しつけ）の5つの頭文字Sをとって5Sと呼ばれており、スリランカではこれが病院管理にも取り入れられ、新生児感染症の低減などの成果をあげた。近年、この成功事例は海を渡ってアフリカ諸国にも紹介され、コストをかけずに医療サービスの質と安全性を向上させるプログラムであるとして広まり、JICAの進める三角協力（南南協力）の優良事例となっている。

ンカは南国フルーツの名産地です。パイナップルは芯まで甘くて食べ応え抜群。その他にもパパイヤやマンゴー、バナナ、マンゴスチン、ランブータン、ジャックフルーツ、キングコナッツなど自慢のフルーツを挙げればきりがありません。四季はなくともその時々旬を味わうことができます。

もう一つスリランカ文化を語る上で外せないのは星占い。実はスリランカでは日本以上に生活に深く浸透しています。彼らは、ホロスコープによって生まれた瞬間に一生の運命が決まると信じているので、個人の結婚相手から大統領による国家行事の日程に至るまで、様々な重要事項を星占いにより決めるのです。このため私たち外国人との間では仕事上の日程調整が難航することも。これは調査せねばならないとして、実在の占い師に占ってもらったところ、ラッキー曜日は月、水、木、土、日（多すぎ）で、ラッキーカラーは赤、青、緑、ラッキー宝石はイエローサファイア（ややこしい）という、占いを信じない人には判断がむずかしい結果をもらいました。

## 経済

上述のとおり内戦終結後のスリランカ経済は絶好調。復興景気を背景に経済成長率は年平均で7%を超え、国民ひとり当たりのGDP（名目）は2014年に3,558米ドルに達しました。これはフィリピンやインドネシアを上回る水準。衣料品や紅茶、ゴムなどの輸出が引き続きこの国の経済を支える一方で、最近では観光業の発展がめざましく、8カ所の世界遺産をはじめ、ビーチ、サファリ等豊富な観光資源が開発され、その近隣には次々とリゾートホテルが建設されています。

コロombo市内でも香港やインド、米国などの海外資本による大型ホテルの建設ラッシュが進み、都市の景観がダイナミックに変化していく様を見ることができ



① コロombo市内



ます。その姿はまるで高度経済成長期の日本のようだとも。市内のどこからでも見渡せる建設中のロータスタワー（電波塔）が日々、高くなっていく光景はスリランカ版三丁目の夕陽でした。

① **コロンボ市内** 高層ビルが建ち並ぶ市内中心部。周辺は大型リゾートホテルの建設が相次ぎ、モノレール建設などの構想もあります。また、奥に見えるインド洋を埋め立ててチャイナタウンなどを整備するポートシティ計画も進行中。

② **ゴール要塞（世界遺産）** スリランカには古代から中世、西洋植民地時代に至る多様な遺跡と自然遺産があります。ゴール要塞は16世紀、オランダ植民地軍がスリランカ南部に建設したものです。

③ **岩の上の王宮シーギリヤ（世界遺産）** 5世紀後半に11年間だけ存在した王宮跡。19世紀後半に再発見され世界遺産に登録されました。サイホンなど当時の最新技術が用いられ、頂上部にも水浴場跡が残されています。地上195mの王宮跡から見る眺めは太古のロマンが漂います。

④ **生命の科学アーユルヴェーダ** 現在も人々の暮らしに欠かせない伝統医療です。美容効果が高いとして日本人女性にも人気が高く、ファッション誌などでもアーユルヴェーダ専用のリゾートホテルが多数紹介さ

れているほど。紀元前3世紀にインドから仏教とともに伝わったといわれています。

⑤ **セイロンティー** 世界的に有名なセイロンティーの始まりは英国の植民地であった19世紀後半。病害で全滅したコーヒーに代わって導入されました。主な栽培地であるスリランカ南東部のヌワラエリヤ地域（標高1,600~1,800m）には、山から谷にかけて見渡す限りの茶畑が広がっています。

○ **宝石** スリランカは古代より宝石の島として知られており、ダイヤモンド、エメラルドを除くほとんどの宝石が採れるそうです。1981年にチャールズ英国皇太子がダイアナ妃に贈った婚約指輪がスリランカ産ブルーサファイアであったことはあまりにも有名。

## 日本の経済協力

日本はこの約50年間、スリランカに対しODAによる様々な支援を続け、特に1986~2008年までの23年間は金額規模でも世界最大の援助国となっていました。その規模は現在も変わらず毎年350~500億円ほど。支援内容は、バンダラナイケ国際空港やコロンボ港の整備などへの円借款をはじめ、各地の橋梁や病院等建設に係る無償資金協力、災害管理等に係る技術協力プロジェクトなど多岐に渡りました。近年では、コロンボ



② ゴール要塞（世界遺産）



④ 生命の科学アーユルヴェーダ



③ 岩の上の王宮シーギリヤ（世界遺産）



⑤ セイロンティー

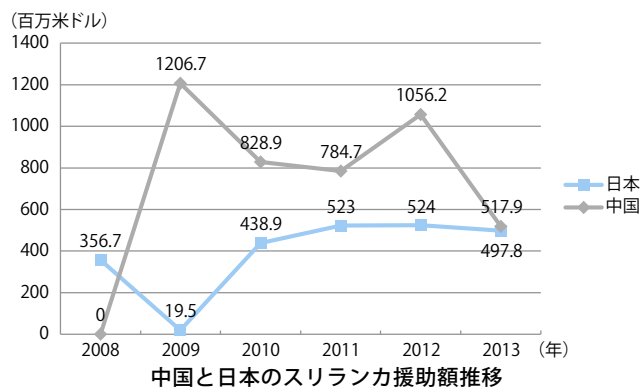
から南部の都市ゴールを結ぶスリランカ初の高速道路が日本の支援によって開通し大きな話題となったところでは、

他方、09年以降にトップドナーとなったのは中国です。中国の援助とされるもののほぼ全ては中国輸出入銀行等の国営銀行を通じた借款によるもので、道路や橋梁、港湾・空港、電力・エネルギーなど、日本の援助と同じような分野でその存在感を示しています。決して金利が低くないにもかかわらず、この国で中国の援助が望まれるのは、その援助にOECD加盟国や一般的な国際金融機関などのドナーが課す厳しい条件がないためです。つまり、中国企業が受注するのであれば、どんなプロジェクトでもOKという自由さ。国内情勢を安定させたい政権にとっては柔軟性の高い中国援助はありがたかったはずでは。

日中両政府は自らの援助をきっかけとしたインフラ輸出を狙っています。例えば日本政府はスリランカ政府に対し、国際空港の拡張プロジェクトや大規模橋梁の新設プロジェクトなどへの支援を約束し、これらに多くの民間企業が関心を示しています。こういった両国の経済的結びつきについてもさらに強化するため昨年、安倍総理をはじめとした日本政府要人が多くスリランカを来訪し、日本のインフラ輸出のトップセールスを行いました。



安倍総理とラージャパクサ大統領（当時、右）



## おわりに

日本とスリランカ両国関係の知られざる重要なエピソードをご紹介します。

1951年のサンフランシスコ講和会議に出席したジャヤワルデネ元大統領（当時財務大臣）は、「憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む」という仏陀の言葉を引用して対日賠償請求権の放棄を明らかにし、日本を国際社会の一員として受け入れるよう訴える演説を行いました。戦勝国の間では当時、日本を分割統治する方向で話し合いが進められていたところであり、同元大統領の演説はそういった国際世論の流れを一気に変えたと評価されています。

その後復興した日本は、65年に締結された500万米ドルの円借款を皮切りに、今でもスリランカを年度供与国としてODAによる支援を実施しています。うがった見方をすれば、ひとつの演説で戦後賠償以上の巨額援助を勝ち取った同元大統領は、希代の名外交官であったといえるかもしれません。とはいえ、この演説がなければ今頃北海道はたぶん「ロシア領」。

さて最後にプチ情報。実は、鎌倉大仏で有名な高德寺の境内に設置されている小さな記念碑には、この演説のエピソードの詳細が彫刻されています。いつか大仏見物をされる際には是非、境内の片隅にひっそりとたたずむこの記念碑を探してみてください。

